

神奈川県横浜市及び鎌倉市において里山保全活動を行う市民団体の特徴と課題

Characteristics and problems of civic groups engaging in Satoyama conservation in Yokohama and Kamakura City, Kanagawa Prefecture

原未季*・一ノ瀬友博**

Miki Hara*, Tomohiro Ichinose**

Abstract: People have been engaging in Satoyama conservation activities. However, civic groups which are working for Satoyama conservation have problems about participants. In this paper, I researched the type of participants and how they worked for Satoyama conservation. It was showed that the main participants were retired people who were mostly over 60. It is necessary for such civic groups to welcome younger people to continue their activities. To invite younger people who are engaging in their child care or work to their activity, I suggested the program in which various people, including parents and their children, can be interested and take part.

Key words : Satoyama conservation activities, civic groups, participants

キーワード : 里山保全活動, 市民団体, 参加者

1. はじめに

人口減少時代を迎えた我が国にとっては、国土をどのように適切に管理していくのかが大きな課題になりつつある。2008年7月に閣議決定された国土形成計画では「国土の国民的経営」という考え方が示された。本来土地は所有者によって適切に管理されるべきであるが、林業や農業の衰退とともに適切な管理が継続できなくなってきた。そこで、所有者やそこで業を営む団体や個人以外の多様な主体による国土の管理が盛んに議論され始めている。多様な主体とは地域住民や民間企業、教育機関、NPO法人などを想定している。しかし、これまで国土管理に関わりがなかった主体が実際にどれだけ貢献しうるのが疑問の声も上がっており、今後具体的な手法の検討が欠かせない。

都市近郊に限って言えば、既に里山保全という形で多様な主体による国土の管理の蓄積があると言える。里山という言葉に代表される二次的自然の重要性は1980年代に注目を集めるようになり、具体的な保全活動が大都市近郊を中心に数多く見られるようになった。その主体のほとんどは都市住民によって構成される市民団体であり、まさに国土の国民的経営のはしりであると言える。里山保全に対する市民の関心の高まりや活動の活発化を受け、横浜市、千葉市、所沢市などでは、緑地の管理を市民団体が行うという事例が出始めた¹⁾。里山や緑地の保全に関わる市民団体に関するこれまでの研究を概観すると、中島ら²⁾は団体の活動の特徴や時代による変遷を調査し、里山活動を定義付ける活動は管理活動であり、活動の小さな達成感がモチベーションにつながることを指摘した。栗田・植竹³⁾は、市民NPOが取り組む自然環境保全活動のフィールドや内容を調査、課題を整理し、公有地での観察学習活動が多く、参加者や指導者、

会員不足を課題として指摘している。これらの研究では、市民団体の抱える課題が指摘されているが、課題の現状については詳細には述べられていない。住民の緑地保全活動への参加プロセスを追った中島ら⁴⁾の研究では、認知、利用・体験、評価・日常的利用、保全活動への参加という段階を踏み、緑地が近距離であり、面積が大きいほどプロセスが発展しやすいことが明らかにされた。しかし、緑地の規模・距離などのハード面には注目しているが、団体の活動内容や運営体制などのソフト面については触れられていない。また、大澤・勝野⁵⁾の雑木林保全活動を行うNPOの運営面の共通要素の分析を行った研究では、活動の継続に必要な要素の把握は行われているが、市民団体が継続に必要な要素を確保するための提案まではなされていない。本研究では、今後の国土の国民的経営の具体的な手法を確立するための基礎的な研究として、これまで実績の多い都市近郊において里山保全活動を行っている市民団体の特徴と課題を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1. 研究対象地

対象地は関東地方で市民活動が盛んである横浜市、鎌倉市から一つずつ設定した。横浜市は新治市民の森、鎌倉市は広町緑地である。新治は行政主導、広町は市民主導で活動が始まったが、どちらも現在まで活発に行われている。

新治市民の森は、横浜市の北部に位置する森である。周囲を田畑で囲まれた森には、竹林、スギ・ヒノキ林、雑木林、谷戸で構成される里山環境が残されている。新治市民の森は「多数の開発計画があった場所」であった⁶⁾。しかし横浜市が主導とな

*非会員・慶應義塾大学総合政策学部 Faculty of Policy Management, Keio University

**正会員・慶應義塾大学環境情報学部 Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

り、地権者と市民の森の契約を結ぶために交渉し、契約が成立、市民の森となったという経緯を持つ。総面積 68.0 ヘクタールという、横浜市では最大の市民の森として 2000 年に開園された。「市民の森制度」とは、緑を守り育てることと、山林所有者の協力により市民が緑を利用できるようにすることを目的として、市が制定した制度である。市民の森として利用可能な区域を市が指定し、土地所有者と 10 年以上の市民の森契約を結ぶ。その後、市が散策路・休憩所などの整備を行い、開園される。維持管理は土地所有者や周辺住民で構成される「市民の森愛護会」が市の委託により行う。樹林地などが市民の森に指定された場合、面積に応じて緑地育成奨励金が支給されるほか、固定資産税・都市計画税の減免、開発・土地の形質の変更などの禁止、更新契約時に継続一時金の支給などの影響が及ぶ⁷⁾。これまで維持管理は地権者中心で行われてきたが、新治市民の森は、地権者以外の一般市民が維持管理に関わった初めての事例である。また、広さ、生物の豊かさの点で、市内で重要な位置を占めており、「横浜市水と緑の基本計画」⁸⁾では隣接する三保市民の森と合わせて、緑の七大拠点の一つとされている。付近には、江戸時代末期に建築された長屋門を持つ「旧奥津邸」がある。新治町では、この「旧奥津邸」、新治市民の森、周辺の田畑を一体として、複数の市民団体が里山文化・環境の維持に取り組んでいる。

広町緑地は鎌倉市の南西部に位置する緑地である。周囲を住宅地に囲まれた緑地には、雑木林、湿地、田畑、谷戸などの里山環境が現在も存在している。広町緑地は市民運動により保全された経緯をもつ。1973 年と 1989 年の 2 回にわたり、事業者による開発の危機にさらされた。計画を知った近隣の一自治会が開発を防ぐために動き出し、やがて他の自治会にも動きが広がり、8 つの自治会と一有志の会からなる「鎌倉の自然を守る連合会」(以下、連合会)が組織された。連合会を中心とした市民の運動により、広町緑地を保全し、動植物の生息・生育地である樹林地などの保護を目的とする都市公園である都市林として整備、保全・活用をすることが 2003 年に決定した⁹⁾。保全が決定した約 48.1 ヘクタールのうち、35.0 ヘクタールについては 2014 年度末までに用地の取得・施設の整備を終え開園予定であり、開園後は市民を主体とした運営を目指している。

2.2. 調査方法

神奈川県において、里山保全活動をボランティアにより行っている市民団体を調査対象とした。一つは横浜市の新治市民の森で活動する「新治市民の森愛護会」であり、もう一方は鎌倉市の広町緑地で活動する「広町森の会」である。対象団体が実施している活動に参加し、参加者と活動状況を観察によって把握した他、詳細を知るためヒアリングとアンケートを行った。また、団体が作成したホームページ、団体に関する文献・学術

論文、市報、団体が作成した資料も参考にした。活動には、新治市民の森は 7 月から 12 月まで、広町緑地は 8 月から 12 月までの期間に参加した。ヒアリング調査は、市民団体の運営・活動の企画を行っているメンバーを中心とする会員を対象に行った。会員の特徴と活動状況の詳細を明らかにするため、活動参加者を対象にアンケートも行った。年齢層、活動への参加頻度、活動継続の意思の有無とその理由(自由回答)について答えていただいた。アンケートは、12 月第一週の活動日に参加していた会員を対象に行った。

3. 結果

3.1. ヒアリング結果

新治市民の森愛護会(以下、愛護会)が市から委託された活動は草刈、清掃・パトロール、森の下刈、園路の補修などである。会員の希望により木の伐採などの森林の整備も市や地権者の許可を得て独自に行っている。他に、地域住民が参加する祭りなどのイベントや、炭焼き、クラフト、農園、自然観察等のクラブ活動も行われている。2008 年度の会員数は約 100 名で、その中で実際に活動している会員は 60~70 名である。毎週土曜または日曜のいずれか一日に活動し、朝 9 時(冬場は 9 時半)に集合し、正午頃に作業を終える。一回の活動参加者は 30 人程度であり、複数の作業グループに分かれて活動していた。会員の方曰く「定年されてから入る方が多く、ほとんどの会員が退職者である」とのことだった。リーダー層の男性の話では、「体力や年齢の問題で活動できなくなった会員もいる」そうで、以前に比べて参加者が減ってきているとのことだった。会の抱える課題として、会員の高齢化による参加者の減少、人手不足が挙げられた。

一方広町森の会(以下、森の会)の 2008 年度の会員数は 30 人弱だが、実際の活動に参加するのは 10~15 人程度だ。結成は 2007 年であるが、有志による保全活動はそれ以前から行われていた。2005 年 7 月に、広町緑地の公園化の基本設計が策定された時点から、「鎌倉広町の森市民協議会」が森の手入れや水路・田畑の復元作業に本格的に着手し、基本設計策定以前にも、周辺自治会の住民が「ゲリラ的に」管理作業を行っていた。森の会では、下草刈、園路整備、植樹、枝払い、つる切り、枝切り、竹林の整理、里山復元のほか、年 2 回の総会、新年会などが行われている。加えて、同じく広町緑地で活動する畑、田んぼ、自然観察の 3 つの会と共に里山林の復元作業や収穫祭などのイベントにも取り組んでいる。第一・第三日曜日を活動日とし、第二土曜日に臨時作業日を設けていた。活動時間は朝 9 時(冬場は 9 時半)から正午前だった。参加者の大半が同じ場所で作業するが、草刈機などの機械を使える会員だけが別の場所で作業することもあった。会員は、「元サラリーマン、主婦が中心」で、主に周辺住民により構成されている。保全運動時代から関わってきた人が活動の中心であり、リーダーなどの役職を務めている。森

の会においても、参加者の不足、リーダー層の高齢化が課題として挙げられた。

表-1 対象団体の比較

	設立年度	会員数	平均活動日数 /月	平均活動人員 /回
愛護会	2000 年	約 100 名	3.7 日	約 36 名
森の会	2007 年	約 30 名	1.9 日	約 19 名

どちらの団体も、活動の担い手の大半が退職者であり、仕事を持っている現役世代の会員はあまりいなかった。その理由について、愛護会の会員の一人は「30～40 代は、仕事や家事で疲れており、山に来られるのは退職者である」と述べていた。森の会のリーダー層の男性は、愛護会の会員同様「40 代、50 代のメンバーは、仕事中心でかつ子育ての最中であり、それなりに制約がある」と述べていた。このように、市民団体に活動する会員は、現役世代は仕事と家事に時間をとられて市民活動にまで手が回らず、活動の担い手が退職者と主婦に限られるとの認識を持っていることが分かった。森の会のリーダー層の会員は、広町緑地の周辺環境についても触れ、「広町緑地周辺の住宅地には、次世代のリーダーと想定する団塊の世代が存在しない」ことも理由として挙げている。広町緑地周辺は、1970 年の湘南モノレール開通に前後して、住宅地として開発されており(鎌倉の～連合会, 2008)¹⁰⁾、開発から 30 年以上経った現在は高齢化が進んでいると推測される。

3.2. アンケート結果

アンケートは、新治市民の森では会員 31 人に配布、広町緑地では会員 16 人に配布し、すべて回収した。まず、団体に所属する会員の年齢層(図-1 および 2)であるが、愛護会は、60～69 歳、70～79 歳の会員が多く、全会員に占める割合はどちらも約 45%である。60 歳以上の会員が全体の 90%以上を占める状況となっている。一方森の会は、60～69 歳の会員が一番多く、全体の 56.3%を占めている。しかし、新治市民の森愛護会と違い、70～79 歳の会員は 6.3%と少なく、49 歳以下の会員が 25%となっており、比較的会員の年齢が若い。その理由は、森の会は愛護会に比べ設立して間もないため、会員の年齢が高くなっていないことと、鎌など女性でもできる作業が多いことで、50 代位の比較的若い主婦の参加に繋がっていることにあると思われる。年齢層に多少の違いはあるものの、両団体とも活動への参加者には 60 歳以上の退職者が多いことが明らかになった。

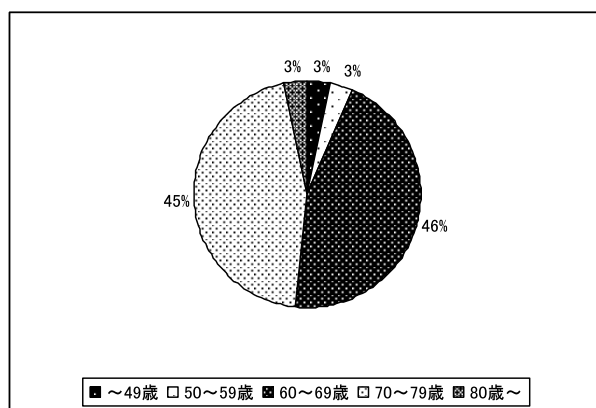


図-1 新治市民の森愛護会会員の年齢層

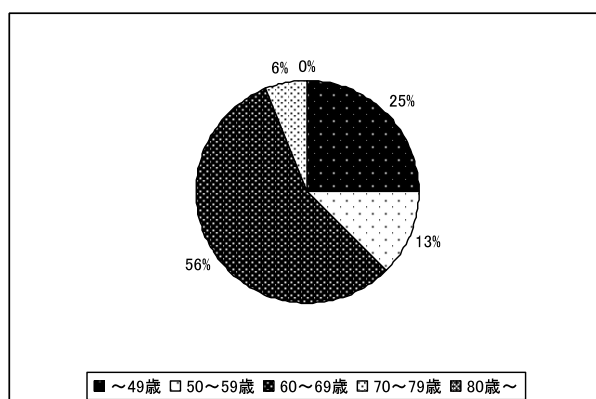


図-2 広町森の会会員の年齢層

次に、年齢層と活動への参加頻度の関係をモザイク図に表した(図-3 および 4)。愛護会では参加頻度の高い会員が多い年齢層は、60～69 歳、次いで 70～79 歳となっている。59 歳以下と 80 歳以上の年齢層では、月 4 回以上活動している会員は一人もいなかった。一方、森の会では月 3 回以上活動に参加している会員が多い年齢層は、60～69 歳であり、次に 50～59 歳、49 歳以下と続き、69 歳以下では、年齢の低下と共に参加頻度が高い人の割合が下がる傾向が見られた。一方、2、3 ヶ月に 1 回の参加や、それ以下など比較的参加頻度が低い会員は、50 歳以下の年齢層にしか存在しなかった。年齢と参加頻度の関係をまとめると、どちらの団体も参加頻度の高い会員は 60 歳以上の年齢層に多く見られることがわかった。

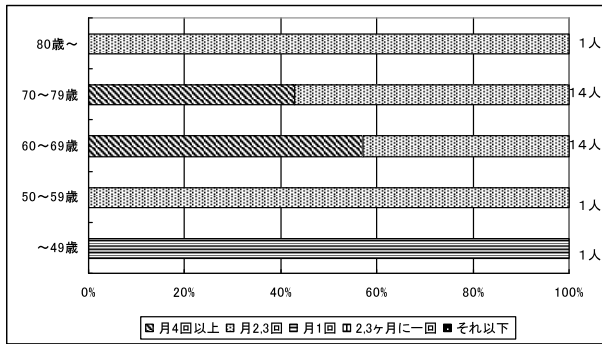


図-3 愛護会会員の年齢層と参加頻度の関係

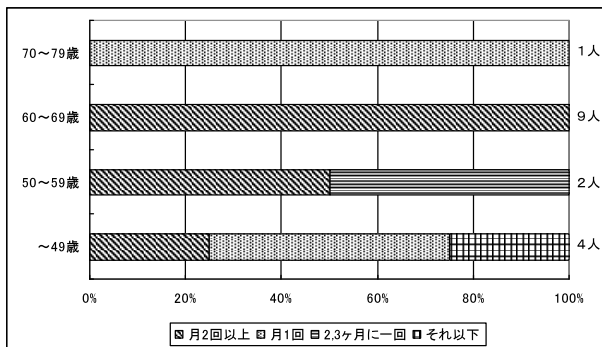


図-4 森の会会員の年齢層と参加頻度の関係

今後の活動について継続の意思を問う質問に対し、愛護会では31人中30人が「続けたい」と答え、1人は「どちらとも言えない」と答えた。「どちらとも言えない」と答えた会員は、身体の具合によるためだった。「続けたい」と答えた会員は、「健康の為」「自然に接する楽しさがある」「皆と楽しく過ごしたいから」など、「自分のため」を理由にした会員と、「緑を後世にのこしたいから」「里山、谷戸田を守る為」など「自然環境の保全のため」を理由とした会員の2グループに大別された。愛護会では、「自分のため」を理由とした会員は31人中18人であり、「自然環境の保全のため」を理由とした会員数(31人中8人)を上回った。一方、森の会では16人中全員が「続けたい」と回答した。「続けたい」と回答した理由を、「自分自身楽しんでできるから」や「緑や樹木が好きだから」など「自分のため」とした会員が16人中5人、「保全に向けた長い活動が実った広町を、次世代につなげたいため」や「地域、地球のために」など「自然環境の保全のため」とした会員が16人中13人であった。活動に参加している会員のほとんどが継続の意思を示しており、その理由は自分のためか、自然環境の保全のためのどちらかに大別されることがわかった。

4. 考察

4.1. 里山保全活動を行う団体の高齢化

里山保全活動を行う団体の会員が高齢化しているという現状

は栗田・植竹³⁾や中島ら²⁾によって指摘されていた。今回、会員の年齢層や参加状況について調査することで、活動への参加者は60歳以上の退職者が多く、この世代の参加頻度は高いことが分かった。また、活動に楽しみや目的を見出し、継続の意思を示しており、活動意欲も高いことも明らかになった。このことから、60歳以上の退職者世代が活動の重要な担い手となっているといえ、高齢化を解決すべき問題として捉えてしまうとこの世代の担い手としての重要性を見落としてしまう危険性がある。

しかし、60歳以上の世代は、体力などの問題で参加できなくなる可能性が高く、会員数の減少につながりかねない上、ベテランの会員から新会員への知識・技術の継承が滞る危険性がある。活動を継続するためには今の退職者層に代わる次世代の担い手を呼び込み、技術や知識を伝える必要がある。

4.2. 次世代の担い手の呼び込み

市民団体による雑木林・里山保全活動の継続に必要な要素の一つに「市民が広く関われる活動内容とレベル」があると大澤・勝野⁵⁾は指摘している。

愛護会・森の会とも下刈、植林、竹林・森林の伐採などの森林管理が主な作業となっている。そのため、鎌、草刈機、チェーンソーなど怪我をする危険性のある道具が使える会員や、森林管理に興味を持つ会員が主な参加者となっており、男性退職者や主婦など参加者の属性に偏りが大きい。

しかし、対象地域で活動する他団体は、親子の参加など多様な参加者が見られる。例えば新治町で活動する「新治谷戸田を守る会」、「一本橋メダカ広場水辺愛護会」には親子や現役世代が参加している。「一本橋メダカ広場水辺愛護会」は、梅田川の広場の除草、清掃、水質検査を行っている団体だ。会員は18名と少ないが、新婚の夫婦といった若い会員も参加している。「新治谷戸田を守る会」は、新治市民の森に隣接する谷戸の水田で水田耕作などの活動を行う団体である。会員数は約140名であり、年齢別に見ると小学生以下11.5%、20~30代19.5%、40~50代27.4%、60代34.5%、70歳以上6.2%となっており、現役世代の参加者も多い。水田で取れたもち米は、収穫祭というイベントにして会員や市民に振舞っている。また、広町緑地では、田んぼ、畑、の会に多様な会員が参加している。「田んぼの会」は広町緑地にある水田で、谷戸の風景と動植物相の再現、稲作文化の継承に取り組む団体であり、会員数は30人ほどである。水田耕作が主な活動内容であり、田植えや稲刈りの際には広く市民に参加を呼びかけてイベント的に行っている。収穫物は他の会と共同で収穫祭を開き、市民にも提供している。田植えや稲刈りの際には多くの子どもが参加し、田植えには143人中56人、稲刈りには65人中23人が子どもであるほか、普段の作業にも30~40代の親やその子の参加もみられる。畑の会は広町緑地内の畑で作物を栽培する活動を行っている。会員数は20人ほ

どだ。作物の栽培は化学肥料と農薬を使わない有機農法に従っている。田んぼの会同様、収穫物は収穫祭で振舞うほか、料理教室や草木染などのイベントにも活用している。畑の会でも、芋ほりなどの作業を中心に、親子の参加や30~40代の会員の参加も見られる。

これらのことから、刃物など危険な道具を必要としない作業や、生産物の収穫・提供といった活動を行う団体は、参加者が多様であると考えられる。このことを里山や森林管理活動に関して指摘した重松¹¹⁾は、森林の中での自然体験や採集体験、収穫物を用いた加工や生産などの活動体験が、自然に対する親しみ、活動の充実感、生産や収穫の喜びに繋がると述べている。里山や森林管理活動においても、刃物を使わない安全な作業や、生産物の収穫・提供などの活動を取り入れ、「管理をする⇒落ち葉・竹・間伐材などが得られる⇒得られた里山資源を作物栽培(腐葉土の利用)、工作、炭焼きなどに活用する⇒作物の収穫や里山資源を使った調理を行う⇒管理の面白さ・必要性、環境保全のしゅみを理解する」というサイクルをプログラムに組み込むことで、参加者の多様化を図り、活動を次世代へとつなげることができるだろう。

5. まとめ

親子や現役世代など、若い参加者を呼び込み、活動を次世代につなげるには、安全で、楽しみの見出しやすい活動を組み込むことが有効だと考える。そうすることで、活動の楽しみや作業の意義を感じやすくなる。つまり、活動の意義を「見える化」することが重要である。その結果として、様々な興味を持った人々が集まるだけでなく、団体への定着率を高めることができるだろう。

国土の国民的経営の担い手となるのは、その組織形態は様々であるとしても、地域住民や都市住民であろう。都市住民が国土管理に関わるための受け皿としてNPO法人に対する期待も大きい。しかし、そのようなNPO法人も都市近郊の里山保全の担い手となってきた市民団体と同様の課題を抱えることになるだろう。さらに、都市近郊においては、都市の人口に対して維持管理する里山の面積は限られていたが、対象が国土となると活動の継続性と効率性は大きな問題として浮かび上がってくる。今後、多様な担い手による国土管理のためには、これまでの様々な主体による活動を検証していく必要があるだろう。

6. 謝辞

本論文をまとめるにあたり、アドバイスをくれた一ノ瀬友博研究会の先輩・同期・後輩のみなさん、インタビューに答えてくださった愛護会の山本憲治氏、金子洋氏、森の会の家原義靖氏、連合会の奥田せい子氏、鎌倉市公園海浜課の方々、横浜市北部公園事務所の方々など、たくさんの方のご厚意を賜りこの

論文を仕上げることができました。厚くお礼を申し上げます。

なお、本研究の成果の一部には慶應義塾学事振興基金による研究補助を受けた。

参考文献

- 1) 座間美和・小林重敬・薮健夫 (1985), 「身近かな緑地を守るための「市民の森」方式に関する研究—総合的緑地保存活用システムの確立をめざして—」, 日本都市計画学会学術研究論文集 20, pp. 475-480.
- 2) 中島敏博・大野集・古谷勝則 (2007), 「都市近郊の住民による緑地保全活動の実態と志向(論説編)」, 造園技術報告集 4, pp. 122-127.
- 3) 栗田和弥・植竹薫 (1999), 「関東地方における市民による環境NPOの自然環境保全活動に関する研究」, ランドスケープ研究 62, pp. 400-404.
- 4) 中島敏博・田代順孝・古谷勝則 (2006), 「都市近郊住宅地住民の周辺緑地の利用から緑地保全活動への参加意欲を持つまでの発展プロセス—東京近郊の都市の事例」, 環境情報科学論文集 20, pp. 199-204.
- 5) 大澤啓志・勝野武彦 (2001), 「市民による雑木林保全活動とその運営に関する研究」, 環境情報科学 30 (3), pp. 62-72.
- 6) 田並静 (2000), 「横浜市の緑地保全事業—新治市民の森愛護会づくり—」, ランドスケープ研究 63, pp. 312-314.
- 7) 横浜市環境創造局環境活動推進部環境活動事業課, 横浜市環境創造局 市民の森, 日本語,
http://www.city.yokohama.jp/me/kankyou/green/shiminnomori/shimin_mori_seido.html, 2009年2月7日閲覧.
- 8) 横浜市環境創造局総合企画部環境政策課, 横浜市水と緑の基本計画, 日本語
<http://www.city.yokohama.jp/me/kankyou/etc/jyorei/keikaku/mizumidori/>, 2008年10月29日閲覧.
- 9) 八甫谷邦明 (2004), 「開発圧力に対抗し緑地を守る市民たちの鎌倉」, 季刊まちづくり 1, pp.3-16
- 10) 鎌倉の自然を守る連合会編 (2008), 「市民運動の25年間の軌跡 鎌倉広町の森はかくて守られた」, 港の人, 307pp.
- 11) 重松敏則 (1999), 「新しい里山再生法 市民参加型の提案」, 全国林業改良普及協会, 181pp.